



熊本県益城町の総合運動公園のテント村で、寝泊まりしていたテントを片付ける男性＝24日

登山家・野口さんら開設

テント村撤去開始

益城町 熱中症や浸水懸念

益城町は24日、総合運動

公園で4月の地震後に開設されたテント村で寝泊まりする住民約600人に、順次避難所へ移ってもらう作業を始めた。猛暑による熱中症や、梅雨時期の浸水被害を防ぐための措置。31日までにテントを撤去する考えだが、利用者の中には「余震が怖くて建物に入りたくない」などと不安を漏らす人もいる。

テント村の利用者は午後3時ごろから、避難所として使われている近くの町総合体育館に入る手続きをした。町は、カーテンで4畳半、6畳程度に区切った居住スペースを用意。岩見初代さん(69)は「中はきれいだし、雨や風をしのげる」と、安心した様子だった。

テント村は、登山家の野

口健さんや国際医療援助団体「AMDA」(岡山市)などが4月下旬、車中泊者らに呼び掛けて開設した。今月24日現在で128張り、465人が利用。他の団体が設けた36張りでも129人が過ごしていた。

町によると、一連の地震により、テント村付近の地盤が約1メートル沈下したという。このため熱中症のほか、梅雨に近くの川が氾濫して浸水被害が起きるのを懸念している。

避難所へ移るテント利用者の中には、不安を訴える人も。2、11歳の孫3人を含む家族7人で避難する富田勝子さん(75)は「孫はよく泣く。周囲に迷惑を掛けたくない」と打ち明ける。「暑くなるので、避難所での感染症や食中毒が心配だ」と話す。

野口さんは「テントの熱中症対策はできると思っているが、河川の問題は重く受け止めている」と言い、民間の代替地を探しているという。